

主権者意識を育む社会科授業の創造

～ 地域と『共生する力』を育む ～

佛 圓 弘 修

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

学習指導要領に定められた「生きる力」が自らの生き方を切り拓き主権者意識を醸成する公的資質の基礎を育てにくくなってきている現状を鑑み、自治と人権の復権を目指した新しい社会科カリキュラムとそれを具現化する授業像を明らかにしようとした。策定にあたっては、広島市立矢野南小学校が目指す「自尊感情に裏打ちされた『共生する力』」を基盤に独自編成した社会科カリキュラムと授業により、学級の仲間や地域住民とともに当事者意識を醸成し合い地域再生に貢献できる筋道を考察した。そのために、授業（第3巻第1号で紹介した社会科授業の発展として「子ども町づくり会議」を実施）をカンファレンスしながら、主権者としての素地となる主体的な当事者意識や実践的行動力を基盤にした『共生する力』の有り様を明らかにした。

キーワード：子ども町づくり会議、授業カンファレンス、ステークホルダー
地域と『共生する力』、主体的な当事者意識、主権者意識

はじめに ～安心を担保する主権者意識を醸成するために

学習指導要領では、「地域社会における事件や犯罪を防止し、安全・安心な町づくりを推し進めるために…」とあり、教科書や副読本もこれに準拠している。しかし、実践の試行錯誤を繰り返す度に、それではやはり『屹立した安全を守らざるを得ない「わが町」のシビヤな現実自治』をイメージさせる結末になってしまったのである。そこで、練り直しながら「防犯・防災」の「安全」を後回しにし、子どもたちにとって身近な「矢野南そうめん流し」を題材にした「安心」を先行させてみたのである。

この経緯を前号に紹介したのであるが、結局、子どもたちの思考過程が導いた発問系列は、「安心」から「安全」への流れこそが正解だったのである。

「なかよくなって安心できる」「顔見知りだったらこんなにちはって挨拶できて安心になる」「知っとる人を増やしていくと安心が増える」という思考過程の末に、「Aさん（青少協初代会長）は全部中学生のためにやっていることが分かりました」「やさしく自主的なおとなになるためにやっている」「町のためにもやっている」という結論を子どもたち自らが導き出していった。Aさんの話は既に聴いてまとめもしているのだが、子どもたちは改めて自分の言葉で問答し直し「ほんとうにわかったこと」こととして反芻し追体験したのである。

そして、授業者の『安心』はよくわかった。じゃあ「安全」は？』という畳み掛ける「切

り返し発問」に対し、子どもたちは一気呵成に「安全ってことは安心とよく似ていて」「顔をどんどん知り合っていくと安全になっていく」「車の多い道路とかで中学生とちっちゃい子が出会ったら横断歩道を一緒に渡れます」「知った人が増えることで安全な町ができます」といった発言を絡めてくるのである。そして、「…けんかもなくなるし、安全ということは『平和』にもつながります!」という発言にまで至るのである。子どもたちが次に考えたくないような、絶妙なタイミングで繰り出した教師の発問は素晴らしかった。

そして、いよいよ「振り返りカード」への誘いが始まる。

3年生の子どもたちは、改めて「めあて」であった「青少協が中学生を中心にそうめん流しを実施することの意味」を納得した上で、「お年寄り、体の不自由な人、小さな子を特に助けないといけない」と発言した班内の仲間や「平和」に着目したC34にそれぞれ承認賞賛のコメントを記している。本時では叶わなかったが、次時には「読み合い」が成されたという。そして、当初描いていた目論見は的中し、子どもたちは「振り返りカード」の中で『ぜひともせいしょうきょうのかたたちと町のことについて話し合いをしたい!』と学習要求を表明してきたのである。読み合いの中でこの案はすぐに可決され、3年1組の子どもたちが早速他学級にもちかけるとこれも満場一致で可決され、遂に『子ども町づくり委員会』の実行委員会が発足することになった。「できるだけ先生の力を借りず、自分たちでやりきりたい」という子どもたちの意見で、会議を進める「司会・進行チーム」や学習したことを方向付ける「学習チーム」が編成され、ここが執行部になって動きはじめてのである。「どうしても学習したことは伝えたい」「でも、話し合いもしてみたい」「どちらかというと、話し合いがしてみたい」という子どもたちの要求に応じて、『学習成果発表の部』と『自由討論の部』の二部制で構成されることになった。実は、来る「そうめん流し」で、いろいろとお願いしてみたいことが続出しているようだった。

1. 「安心・安全な町づくり～そうめんて結ぼう、地域のつながり～」の続編として

(1) 「子ども町づくり会議」の授業記録と考察

・日時 平成29年7月7日（金）3・4時間目

・対象 矢野南小学校3年生：（1組，2組，3組）全員 115名

【ゲストティーチャー】

・矢野南青少協：A初代会長，B現会長，C副会長，D副会長，Hさん（OB）

【オブザーバー】

・矢野南小学校担任：E先生（1組），F先生（2組），G先生（3組）

・広島都市学園大学：佛圓弘修（指導・助言）

発言者	発言内容
3年司会・進行チーム	〇しせい、今日は矢野南青少協の代表の4人の方をおまねきして『矢野南子ども町づくり会議』を始めたいと思います。今日は、たいへ

発言者	発 言 内 容
	<p>んおいそがしい中をぼくたち3年生のために来てくださりありがとうございました。</p> <p>○私たちも「安心・安全な町づくり」で矢野南のそうめん流しをとおして学んだことや聞いてみたいことをたくさん話したいと思いますので、短い時間ですがたくさんお話してくださるとうれいします。よろしく願います。</p>
3年司会・進行チーム	<p>【「学習成果発表」の部】</p> <p>○これから3年生がそうめん流しについて中学生ボランティアの仕事など学んだことを発表します。聞いてください。</p>
3-1（1人）	<p>○そうめん流しは、どんなものか分からなかったけど、調べると中学生が中心になっているということが分かりました。</p>
3-2（1人）	<p>○ぼくは、中学生がそうめんをゆでたり、ほぐしたり、流したり、つゆを入れたりしていることに気がつきました。</p>
3-2（1人）	<p>○<u>食べられない人のところからめんを流している</u>ことが分かりました。なぜかと言うと、みんなが食べられるようになってほしいから、<u>上や真ん中、下から流していました。上ばかり流していると小さい子が食べられないから、上や真ん中、下から流している</u>ことが分かりました。</p>
3-1（2人）	<p>○中学生が、つゆを入れる仕事に気がつきました。<u>走ってつゆがない人につゆを入れていました。小さい子にはかがんで入れてあげて</u>いました。</p> <p>○ぼくは、真ん中からそうめんやフルーツを流していることに気づきました。<u>小さい子でも食べられるようにしているんだ</u>なと思いました。</p>
3-1（1人）	<p>○<u>始めは、らくちんだから任せているのだ</u>と思ったけど、後から勉強して<u>すごく大変な仕事だから中学生に任せているのだ</u>と思いました。でも、なんで大変な仕事を中学生に任せているのだろうと予想をしました。</p>
3-3（1人）	<p>○そうめん流しは、<u>中学生でもできるかな</u>と思って、青少協の人達が中学生の人を呼んだと予想しました。<u>他のお祭りだと難しいし危ないから</u>そうめん流しを任せているのだと思いました。</p>
3-2（1人）	<p>○<u>人数が少ないから</u>、中学生ボランティアを集めてやっているんだと予想しました。</p>
3-2（1人）	<p>○手足が疲れているのに最後まで頑張っているのは、中学生の体力に関係があるかと思いました。<u>中学生の方が青少協の人達よりも体</u></p>

発言者	発言内容
3-3 (2人)	<p>力があるからやっていると予想しました。</p> <p>○中学生が見本になるための私の考えは、小学生の見本になってほしいから中学生に任せているのだと思いました。<u>小学生の見本になるチャンスだと思ったからです。</u></p>
3-3 (1人)	<p>○<u>なぜ、中学生に任せているのか</u>を予想はいっぱいしたけど、<u>Aさん達の本当の思いが知りたくて、ビデオを見ました。</u>その結果こんなことが分かりました。</p>
3-2 (1人)	<p>○Aさんのビデオを見て心に残った言葉があります。</p>
3-2 (1人)	<p>○<u>この町をつくるのは、今の子ども達という言葉です。</u></p>
3-2 (1人)	<p>○2つ目は、<u>大人は口出しをしてはいけないという言葉です。</u></p>
3-1 (1人)	<p>○Aさんのお話の中でびっくりしたことがありました。それは大人が中学生に口出しをしてはダメということです。<u>口出しをした大人は、他の大人に怒られます。ものすごくびっくりしました。</u></p>
3-2 (2人)	<p>○<u>子ども達が未来、自分達でできないといけないから、口出しをしてはいけないと考えました。子ども達がこの町をつくっていく力をつけるために、大人は口出しをしてはいけないと考えました。</u></p>
3-1 (1人)	<p>○<u>未来の子どもを育てるために、中学生に任せている</u>と思いました。</p>
3-1 (2人)	<p>○Aさんの話しているのを聞いて、<u>なぜそうめん流しを始めたのか、なぜ中学生に任せているのか</u>がよく分かりました。どうしてそうめん流しを始めたかという、<u>みんなが繋がって、安心・安全な町をつくるためだと分かりました。</u></p> <p>○Aさんの言っていた今の子ども達というのは、中学生や自分達だと思いました。</p>
3-3 (1人)	<p>○Aさんは、<u>そうめん流しをずっと続けていきたい</u>と思ったと思いますが、<u>だから中学生に頼んで未来までそうめん流しをする。そして、安心・安全な町になってほしい</u>と思ったと思いました。</p>
3-1 (1人)	<p>○Aさんのお話の中で1つよく分からない言葉がありました。それは、<u>知り合いが増えたら安心・安全な町です。私達は、最初知り合いが増えたら安心・安全ってどういう意味かよく分かりませんでした。そこで、具体的にどういう時に知り合いだったら安心できるか安全になるか考えてみました。</u></p>
3-3 (1人)	<p>○<u>もし、不審者が襲うことや誘拐しようとしても、僕たちを知っている人がたくさんいます。だから、怖いことをされても助けてもらえます。</u></p>
3-1 (1人)	<p>○<u>ぼく達は、もし不審者が町にいたとしたら、こう予想して考えました。もし、周りに不審者がいるとしたら怖い</u>なと思いました。周</p>

発言者	発 言 内 容
3-3 (2人)	<p>りの人が誰も知らない人だったら、安心して遊べないけど、<u>周りの人がみんな知っている人だったら、安心して遊べるし何かあったら助けてくれるから、安全だ</u>と思いました。</p> <p>○災害の時のことを説明します。私達が地震の時に避難場所に知り合いがいたら、<u>安心・安全だ</u>と思います。理由は、もし地震がきて、<u>知り合いがいなかったら助けてくれる人が少ないから、知り合いを増やしたいし、自分の命を自分で守るのが大切だ</u>と思いました。</p> <p>○私達は土砂崩れの時のことを説明します。私達は<u>土砂崩れの時に、自分の家が流されて知り合いや友だちがたくさんいたら、泊めてくれて安心・安全だ</u>と思います。理由は、もし土砂崩れが起きて<u>自分の家が流されたら、知り合いや友だちが少なかったら、もしかしたら、家に泊めてくれないかもしれないから安心・安全の方がいい</u>と思います。</p>
3-1 (1人)	<p>○分かったことは、一人が助けたら、また助けてもらった人が助けてくれた人を助けるんだと分かりました。<u>理由は、一人ひとり助け合うと、助けてもらった人がよかったな嬉しいな</u>と思うからです。私達は、<u>安心・安全な町づくりを勉強して、みんなで協力して一人一人助け合う町にしていきたい</u>なと思いました。</p>
3-1 (2人)	<p>○これから僕達にできることを発表します。</p> <p>○僕達は、子どもが道具を忘れたら貸してあげることを考えました。</p>
3-2 (3人)	<p>○僕達は、小さい子どもが喧嘩をしていたら、止めることを考えました。</p> <p>○私達は、自己紹介をして名前を覚えてもらうことを考えました。</p> <p>○僕達は、小さい子にとり方のコツを教えてあげることを考えました。</p>
3-3 (2人)	<p>○僕達は、竹に色をぬることを考えました。(ペンキ)</p> <p>○このようなことはさせてもらえませんか？</p> <p>※以下記録は割愛するが、「第3巻第1号」に掲載した授業での成果をポスターセッションの形態で発表し、最後に、Aさんから青少協の成り立ちを聞いた。</p>
3年学習チーム	<p>【「自由討論」の部】</p> <p>○ではせっかく来ていただいた3人の方も入ってもらって、自由に話し合いを進めていきます。みなさん、準備はいいですか？</p>
3年生 (口々に)	<p>○はいっ！</p>

発言者	発言内容
3年生 C 1	○質問いいですか？ 青少協に入ってよかったと思うことはありますか？
Aさん	◎みんなと知り合えたことが一番よかった。挨拶もいっぱいできる！
Bさん	◎朝も帰りもみんなが声をかけてくれる。いっぱい元気がもらえる！
3年生 C 2	○ほくらは元気をもらってます。どうやったら青少協に入れるんですか？
Cさん	◎ありがとね。今入っている人で、大学生が入ってきている。大学生を卒業して、社会人になったら入れるよ。
3年生 C 3	○今じゃだめなんですか？ 小学生じゃだめですか？
Cさん	◎青少協に入りたい人？
3年生（口々に）	○は～いっ！！
Dさん	◎うう～ん、これはむずかしいねえ。考えんといけんかもわからんねえ。
3年生 C 3	○ぜひ考えといってくださいっ！
Bさん	◎町には青少協だけでなく、社協とか老人会とか女性会とか体協とか民児協とか、そして子ども会とかいろんな団体があるんよ。それと町内会が力を合わせて町づくりをしとる。毎月決まった時に集まって、みんなで問題点について話し合ってみんなで解決してこうとしとるんよ。そして、そのためにいろんな行事も作とるんよ。
3年生 C 5	○学校と似てるんですね。ほくらは学級会でいろいろ問題点を話し合ってみんなで解決してってます。
Bさん	◎そうそう。同じじゃ。そういうのを自治いうんよ。なろうたことある？
3年生 C 5	○ないけど覚えときます！ 青少協をやってお金ってもらえますか？
Bさん	◎もらえません。
3年生 C 5	○もらえないのにやるんですか？
Bさん	◎そう、それがボランティアの基本！ おじさんらも中学生もお金じゃないもんをたくさんもらとるんよ。わかる？
	※中略
教師（E）	●Aさんは青少協の元会長さんですが、もう何年も何年もやってきてらっしゃるのですが、お金を一円ももらっていません。なのにどうして、こんなにエネルギーをつかって頑張っているのかな？ ど

発言者	発 言 内 容
教師 (G)	うしてだと思う？ ●みんな、青少協に入りたいって言ってたけど、お金が一円ももらえないんだよ。もらえないのに、どうして入ってるのかな？
3年生 C 8	○とにかくやっている人の笑顔が見たいから。
教師 (G)	●そう。「私は、やっている人達、来てくれる人達の笑顔が見れたらそれでいいんだ。」と言われていたね。よく聞いていたね。
3年生 (口々に)	○う～ん、なるほど～。
	※中略
3年生 C 9	○そうめん流しを始めて大変だったことは何ですか。
Aさん	◎大変だったことは、ないんよ。なぜないかと言うたら、みんなが喜んでくれることだから。全くないんよ。それよりか楽しいんよ。竹を切り出す時も一緒に汗をかくと楽しゅうてしかたないんよ。
Bさん	◎子ども達もだけど、わしらも楽しいんよ。
Cさん	◎それが一番嬉しいんだよね。
3年生 C 11	○みんなのためにお金をもらわないで頑張ってる。
	※中略
教師 (F)	●お金を一円ももらわずに人の役に立つことを頑張る人達のことをボランティアっていいです。中学生ももらっていません。高校生も大学生ももらっていません。なのに、頑張っているわけです。それは、みんなが「そうめん流しのひみつ」で一生懸命に勉強した安心・安全な町づくりをするためなんですね。今日から、みんなは安心・安全な町づくりの主人公になります。町づくりの主人公です！
3年司会・進行チーム	○今日はとってもいい勉強ができたと思います。みんなのやる気がよく伝わってきました。Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、今日はありがとうございました。
3年生 (全)	○ありがとうございました。

2. 地域再生への効果

(1) 分析・考察

子どもたちの正の連鎖は、地域住民にとっても全く同様に正の連鎖となったことがインタビューによる聞き取り調査で再確認できた。(※アンケート及びインタビューは省略)

Aさんの『『◎弱い立場の人が大切にされる町にしたい』というのは会議でも出されたが、町の大人が考えないといけない点だと思った。難しいと思うが排除したらいけないことを子どもが教えてくれた。』は、今回の最も大きな収穫かもしれない。インタビューの中でも、「社会的弱者を温かく尊重できる町づくり」を子どもたち自身が実践しようとしているこ

とへの驚きと発見を繰り返し賞賛されていた。まさに、「自治による人権の復権」の大切さへの着眼である。その他の執行部の面々も同様であった。学校の教育活動が地域を刺激し変化発展させていく契機になりうる典型例だったともいえる。基町が多文化共生の町にシフトしていくきっかけになったのも、子どもたちの純朴な一言や些細な行動がきっかけであった。校長が教育コーディネーターとして心を砕いて地域の中に飛び込むことは重要である。しかし、地域（住民）が本当に変わっていくのは、変わっていく子どもが火をつけるからである。そういう意味においても、今回の「矢野南版ローカルカリキュラム」と「授業」が子どもの中に芽吹かせた「共生の力」は、地域の中にも「共生の力」を着実に芽吹かせていく可能性を感じさせた。

インタビューは、Hさんのキャリアの原動力となったことも再確認できた。次代を担う子どもを育てる教職に就きたいという大きな動機付けになったのが町のそうめん流しであることを聞き、改めて地域行事のもつ力を感じた。授業の中でも（録画ゲストティーチャーではあるが）登場してもらい、3年生の子どもたちに大きなインパクトを与えた。Hさんが後輩を誇りに感じたように、3年生にとってのこの先輩は実に大きな誇りになったのである。「地域に育ててもらい、地域に恩返しする」という、かつて地域に当たり前のようであった往還が再生しつつあることを肌身で感じる事ができたと同時に、この往還を自己運動として再生できるように刺激し続けていく必要性を痛感した。

（2）テーマ型コミュニティの中で

全国的に地縁型コミュニティが崩壊している今日、旧来の「地縁型コミュニティ」をもたない矢野南ニュータウンは、新タイプの「テーマ型コミュニティ」のモデル的な地域である。初夏の「そうめん流し」、盛夏の「来んさい祭」、厳冬の「とんど」を節目に、様々な「テーマ」を設定し町の絆づくりに力を入れてきている。しかし、少子高齢化の波は勢いを増すばかりで、行事の勢いも地域団体の元気もかつてほどではない。

こうした状況を打開するためには、どれだけ衰弱していこうが、「テーマ」を大切にそれを次代に受け継いでいこうとする地域の営みと地域住民が込める思いを学校が汲み取り、地域住民が「未来の宝」とする子どもたちを媒介にエンパワーしていくしかない。学校が本来持つべき役割を見失うことなく、その発想を持ち続けて地域に関わっていくことが必要不可欠である。しかし、ここで重要なのは、『「テーマ」に込められた思い』であり、それを『汲み取る』という意味である。

矢野南の「そうめん流し」は単なる季節行事ではなく、高齢化する青少協の執行部たちの「時代の担い手育成」という、矢野南ならではの尊い「テーマ」がある。本稿では紹介しきれなかったが、「来んさい祭」では地域（主催）クラブとしての合唱クラブ等々が総出演するが、ここでは子どもから高齢者までが仲良く肩を組んで歌い踊る光景が見られる。足腰の悪いお年寄りを子どもたちがかばいながら支えながら歌い踊る姿にも、まさに矢野南ならではの「テーマ」がある。さらに「とんど」では、高く積み上げられた藁の塔

で各家庭のしめ縄や習字を炊き上げてもらい無病息災や学業成就を祈願するのであるが、子どもの力では到底投げ上げられず四苦八苦しているところに見知らぬ大人たちが手助けしながら「今年も元気で頑張るんで!」「ありがとう!」と声を掛け合う姿は見ていてほえましく、ここにも「テーマ」がある。それらは一瞬垣間見える光景でしかなく、常態化している全てではない。しかし、この一瞬の光景を紡ぎ出すために地域住民がどれほどの工夫や苦勞を積み上げてきているか、その一瞬を紡ぐための「思い」を学校は『汲み取ら』なければならない。

そして、実はこの積み上げと思いの中にこそ「地域の自治」が躍動しているのである。

これをどうカリキュラム化するか。かつて『川口ブラン』は「もの」をしらみつぶしに汲み取りカリキュラム化したのであるが、「こと」や「思い」にも対象を拡げた上でリサーチし、汲み取ってカリキュラム化していくことが必要不可欠である。そのためには、『躍動する「地域の自治」を見逃さないという視座』を持って観察し、聞き取り、子どもの目線に立って、子どもの思考過程を想定しながらカリキュラム化していくことが重要である。

3. 地域再生に及ぼす効果の考察

(1) 主権者意識は育ったか

主権者意識とは、いうまでもなく「社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく意識」である。これまで再三述べてきたように、「当事者意識」、「実践的行動力」、「共生する力」が鍵になる能力であり、それがやがては投票行動に繋がっていく大きな力となるのである。「生きる力」が公民的資質の基礎を養い主権者意識を育てられて来なかった現実を鑑み、本稿では社会科の入口となる小学校3・4年生のカリキュラムの再編成に着手し、授業化する実践的な研究を行った。中学年で地域社会の一員として町づくりを『自分ごと』として捉え、当事者（担い手）としての視点を持ちながら歴史・公民学習に入っていくことさえできれば事態は深刻化していない。入口の2年間をかけて当事者意識、主体者意識、実践的行動力を総崩しし、社会科嫌いを大量に作ってきたのである。したがって、このボタンのかけ違いにこそ大罪があるとの仮説に立ち、それを乗り越える「社会科カリキュラム」と授業をつくってきたのである。

子どもたちは教材を探求し、地域住民も巻き込んだ学び合いの授業の中で、着実に変容した。それは豊かでダイナミックな自治が創る『安心』づくりのための「町内行事（そうめん流し）」が、後継者としての子どもたちには何よりも魅力的で、だからこそ『安全』づくりの基盤になることを身をもって理解することができた。新たな企図をもった「社会科カリキュラム」のもとで、町内自治活動のダイナミズムを問う「授業」に挑ませることで当事者意識と主体者意識を持った担い手意識を醸成したのである。国や地方自治体は防犯・防災ありきのトップダウン組織を作るための町づくりを推し進めようとしているのではないかとさえ思わせる昨今であるが、これでは（公助を乗り越える）共助や自助が機能しないことを子どもたちが身をもって教えてくれた。今回の研究過程では町づくりの概念

そのものも問うたからこそ、子どもたちの思考に沿ったカリキュラムや授業をつくることができたともいえる。将来主権者としてより良い町（国）づくりを担うことができるための大きな試金石になると考える。

授業後、3年生の子どもたちは「子ども会」という選択肢は選ばず、「矢野南青少協子ども部」に入りたいと言い始めた。小学生という利点を生かして町づくりに寄与したいと申し出たのである。自分たちのかけがえのない町をより良くしていくための担い手としてできることを行動に移したいとの強い思いからである。「安心・安全な町づくり」を学習し終えた3年生OBは年々着々と増え続け、共に町をより良く生きたいと願っている。学習指導要領が「生きる力」を求め続けるのであれば、「共生する力」が内在しなければ持続可能な社会を実現することが困難であることを本研究は物語っている。

（2）地域住民をステークホルダーに

ステークホルダーとは、一般的に企業活動により様々な影響を受ける利害関係者のことをさすが、ここでは学校教育活動により様々な影響を受ける利害関係者、とりわけ保護者や地域住民などは学校の教育力の質やその動向に極めて敏感に反応し左右されるという点でまさに「利害関係者」であり「運命共同体」といえる。今回の社会科授業に位置づけられた「子ども町づくり会議」は、地域住民と3年生の子どもたちがともに利害と運命を共有しながら作り上げたものであるが、地域住民は子どもたちによって自らがステークホルダーであることを覚醒し町づくりを始めつつある。事実、子どもたちがさまざまに発信したものを受け止めて、まずは日々の声掛け活動に、そしてすぐに始まったそうめん流しに、さらには青少協の定例会議や諸活動に、エンパワーされた痕跡をとどめながら歩み始めているのである。

（3）地域は再生されたか

これまで黄色いジャンパーに身を包んだ地域の方々は、横断歩道の渡り方や挨拶の仕方など規範から逸れる子どもに対しては厳しい注意や説教に終始することが多く、後に対話も成立しにくく、子どもたちにとっても「積極的にはかかわりたくない」「口うるさい大人」でしかなかった。しかし、実践後には、親身になって褒めてもくださる「愛着をもてる」「尊敬できる隣人」に変わりつつある。家庭の事情による遅刻の常習犯や発達に遅れのある子どもに対する声の掛け方が決定的に変わってきている。理由を尋ねたり、説得的になったり、子ども一人一人をもっと理解しようと努力をし始めたのである。学校への参観要請も格段に増え、仲間を伴って授業を参観する光景も見られるようになった。よく聞いてみると、多数の眼で子どもを褒める材料を探しに来たのだという。名前や顔もよく覚えて帰られているようだった。

そうめん流しは子ども町づくり会議終了直後から準備が始まった。無論そのように逆算して仕組んだのであったが、子どもたちは宣言通り「1枚でも多くのポスター」を作成し、

縦割り班の兄弟学年の子たちにも応援要請して大量のてるてる坊主も自主的に作り、会場周辺に所狭しと飾り付けた。残念ながら当日は雨天中止になったが、実行委員会代表（司会進行や学習チームのリーダーたち）が総括会議にわざわざ呼んでもらい、学習の成果や今後の意気込みも語らせていただいた。オブザーバー参加した担任たちは、3年生代表の堂々とした態度に驚き、中高大生、教師になったHさんをはじめ青少協の会員総出の歓待に、「本当にこの学習に取り組んでよかった」という感想を漏らした。中学生手作りのそうめんの何とおいしかったこと、担任たちはその味にも大感激して帰ってきた。

今日、地域団体は全国どこを見ても「金太郎飴」状態である。人手不足ということもあるだろうが、地域住民によれば必然ともいう。先に挙げた各種団体は人材でも重複しつつがないとなかなか機能しないのだそうだ。したがって、青少協での3年生たちの活躍は瞬く間に地域中に広がった。

では、矢野南の地域は再生されたのか。たかが一つの実践で地域が再生されるわけはない、されど一つのささやかな変化の兆しが確実に再生への灯をともした。

おわりに ～新たな共生社会の地平へ

平成時代の終焉を迎え、巷では平成という時代を回顧したり総括したりと、かまびすしい。「ものづくり日本」の地位の危うさ、不正の蔓延等々。相変わらず後を絶たない教職員の不祥事とも似たところがある。組織内での自浄作用のガバナンス能力が衰弱しているのである。個人が自分の頭で考えて行動しているのではなく、あるいは社会を良くしようと目的を持って働くのではなく、誰かに言われるままに「ただ働くだけ」になってしまっているのではないかと思うことが多い。平成はどんな時代だったかと問われたら「アイデンティティクライシスの時代」だと答える人もいる。日本人は皆、自分の頭で物事を考えず、判断をしなくなってきたのではないかと疑心暗鬼になるのだが、平成が終わりを告げるのなら「自己喪失の時代」も終わりを告げなければならないだろう。「自分一人は不十分な人間にすぎないかもしれないが、仲間とともに自分たちの頭で考えた知恵を出し合い行動し合っていくことで社会を良くしていく時代」にポジティブに転換していかなければならない。

本稿では、主権者意識の喪失を一貫して研究動機の入りに掲げ、学校が地域にも発信し続ける「共生の力」の有様を問い続けてきた。崩壊しかけたように見える地域の中にも目を凝らすと必ず地域社会を良くしていこうとする営みがある。そして良くしていこうとしている人たちがいる。学校が果たすべき教育コーディネーションの役割は大きい。それらを目利きし、教材化し、子どもとともに共生していく仕掛けを早急に作っていかなければ、公立学校といえども早晚地域と共倒れするところまで来ている。

今後、教育公務員特例法等の一部改正法の施行で大学と学校と地教委のより緊密な連携が求められる時代に入ったことも考慮しながら、自分の頭で地域を切り拓きよりよい地域社会を実現できる資質と能力ー「共生する力」を持った子どもを育てていくことのできる

教師を育てていきたいと考えている。

謝辞

広島市立矢野南小学校の小川健一校長先生をはじめとした教職員の皆様には格段のご配慮を賜り、日常的な研究連携を図らせていただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

主要参考文献

- ・水内 宏 (1971)：『教育課程<総論>《戦後日本の教育改革第六巻》第二部第一章』東京大学出版会
- ・水内 宏 (1976)：『日本の教育5 教育課程第一章』東日本出版社
- ・水内 宏 (1985)：『戦後教育改革と教育内容』新日本新書
- ・水内 宏 (1989)：『学校づくりと教育課程』青木書店
- ・水内 宏 (2017)：『教育学のすすめ』一藝社
- ・梅根悟・岡津守彦 (1959)：『教育基本法問題文献資料集成 第14巻 社会科教育のあゆみ』小学館
- ・安彦忠彦 (1999)：『新版カリキュラム研究入門』勁草書房
- ・梅根 悟 (1947)：『新教育への道』誠文堂新光社, 1947.12.15 (初版)
- ・大田 堯 (1949)：『地域教育計画－広島県本郷町を中心とする実験的研究－』福村書店
- ・岡津守彦 (1983)：監修『教育課程事典（総論編）』小学館
- ・小原友行 (1998)：『初期社会科授業論の展開』風間書房
- ・海後宗臣 (1949)：『教育の社会基底』河出書房
- ・海後宗臣 (1981)：「川口市の社会科」『海後宗臣著作集<第六巻>社会科・道徳教育』東京書籍
- ・重松鷹泰 (1955)：『社会科教育法』誠文堂
- ・中央教育研究所 (1947)：『社会科概論』金子書房
- ・東大カリキュラム研究会 (1950)：海後宗臣監修『日本カリキュラムの検討』明治図書